出世景清

序さても其の後。詞妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大乘八軸の骨髓。信心の行者大慈大悲の光明にあづかり奉る。地爰に平家の一族惡七兵衛景清は。西國四國の合戰に討死すべき者なりしが。死は輕くして易し生は重くして難し。所詮命を全くして平氏の怨敵。右大將賴朝を一太刀恨み。平家の恥辱を雪がんと落人となり尾張の國。熱田の大宮司に聊か知るべありければ フシ深く。忍びて居たりけり。地元より大宮司は平氏重恩の人なれば。深くいたはりひとり姫に小野の姫と聞えしを景清にめあはせ。子とも婿ともしづき給ふ フシ志こそわりなけれ。景清大官司の御前に出で。誠に某無二の御懇志にあづかり長々浪人仕り。身は埋木と朽果てん末頼みなき身ながらも。せめて賴朝を一太刀親ひ君父の恨を散じ。その後は腹切つて兎にも角にも罷り成らんと空しき月日を送り候。詞然る處に今朝屈竟の事を聞出し候其の故は。鎌倉殿は南都東大寺大佛殿を御再興あるべしとて。秩父の重忠かの奉行を承り。昨日の暮ほどに此の處を打つて通り候よし。たとへば賴朝七重八重の城廓に取り籠り。天地に鐵の網を張つて用心きびしく候とも此の景清が一念にてなどか狙はで候べき。地さりながら重忠常に賴朝の側を離れず。神變不思議を兼ねたれば其の身は都にありながら。心はなほ鎌倉殿の側にあり。詞かう申す景清は二相を悟り候へども重忠は四相を悟る。賴朝に出合ひ討たんとせしこと三十四度に及べども。重忠に隔てられ終に本望遂げ申さず。地然らば先づ重忠をさへ打取らば。賴朝を討たん事踵を旋らすべからず。重忠此の度東大寺の奉行に上る事幸ひかな仕合かな。天の時來り。たり忍びやかに南都に下り。重忠が首提げて參らんにスエテはやお暇と申さるる。地大宮司聞き給ひ實に屈竟の時節ござんなれ。構へて人に悟られ給ふな急いて事を仕損ずな。片時も早くとありければ。北の方も悅びて。宗盛公よりたび給ふ痣丸といふ名劍を景清に奉り。首尾よく仕おほせ給ひなば。一日も逗留なく。早く御歸りましませと門出の盃出さるれば。互に千秋萬歲と獅子の勢龍の勢勇み〳〵て行く虎の。尾張の國を立出でて奈良の。都へ 三項上らるる フシいで其の頃は。地文治五年春過ぎて夏來にけりし白旗の。源氏の大將賴朝公は。南都東大寺大佛再興の御願にて。畠山の重忠奉行職を承り。松にも花を春日野や飛火の野邊に假屋をうたせ。黃目長寸切

定方大和大江に飛彈匠。仙人り木造り事終り今日吉日の柱立。我が身は棲敷に一段高く村濃の大幕打たせ。つゞいて見えしは本田の二郎其の外の侍ども。帳場々々に印を立て弓鉾長刀吹貫に。柳櫻をこきまぜてオク花やかへなりける御普請なり。かくて番匠の棟梁。木工の頭修理の頭。おのがしなれる出立にて。惠方に打向ひよつゞ家堅めの。祭文を唱へつゝ御幣をふつて再拜し。手斧はじめのその儀式。嚴重にこそつとめけれ。地むべも富みけりさきくさの。三葉四葉の大伽藍手斧はじめの儀に。千代をかためて柱立。春は東に立ちそむる。是萬物の初なり。夏は南にめぐる日の。ハルヤシ菖蒲が軒や。かをるらん。秋は夕西の空つきせぬ契かたどりて。天の河原の橋杙しられたつるや突鉋。雲をそなたに遣鉋。冬は北にそつゝ井筒水こそ家の寶なれ ギンヤツリ めぐれやへまはれ井戸車。がまど賑ふ ツシへつい殿。先づ陰陽の二柱。二本の柱は女神男神を表したり。三本の柱は。三世の諸佛四本の柱に。四天王。四海泰平民安全と。祝ひこめたる墨壺の。絲の直なる。國なればゝ寶や宿に三目錐鋸。地層の數々と。濱の眞砂と君が代は ハツミヲシ 數へつくさじ面白や。然るに此の。大伽藍と申すは。ギン篇聖武。皇帝の御建立。三國無雙の霊場なり。兜率天の内院を。さもあり〳〵とうつさるる。堂の高さが二十丈。佛の御丈は十六丈雲に續けばおのづから。月を後光と 舞三笠山。柱のかずは天台の。篇一念三千の。機をあらはして。三千本と定まれりナホス軒の櫨は。法華經の文字の數六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狛。さて正面より四方四面の。願々の彫物には。松に唐竹牡丹に獅子。豹と虎とが威勢を爭ひ百千萬の獸を追つたて。追つたて。くるりくるりと巖に追上げ追下し風に嘯く波間より。紫雲を卷きて登り龍又下り龍。玉を攫んで虛空に捧げ。鱗を立てたる地其の勢。手をつくさせて彫りつくし。扨棟瓦軒瓦。金銀瑠璃。玻璃。硨磲瑪瑙珊瑚琥珀水晶を葺きたて〳〵。珊瑚棚の梶をひつしと打つたる臺には。金襴錦に柱を包んで黄金の鉞を輝かせん。棟木を負ふの柱をして。南畝の農夫よりも多く。梁に梁するの椽は機上の工女よりも多く。釘頭の磯々たるは庚にあるの粟よりも多く。旦暮の說法讀誦の聲。は市人の言語よりも多からしむ。佛法繁昌四海鎭護の大伽藍。如意滿足の柱立めでたし。〳〵。ヲヽめでたしと。手斧おつ取りてうてうてう。槌おつ取つてはしつてい〳〵。鉋取りのべさら〳〵〳〵。ゑいさら〳〵〳〵てう〳〵てうと。打始め取始め。三々九度の御酒をさゝげ千度百度。祈念して重忠に色代し棟梁座をぞ下りける。手斧始めも事過ぐれば。數千番匠下々まで皆々小屋にぞ 三篇へ入りにけり ツシ 遁の後より。地四十ばかりの男なるが人足と思しくて。畫餉の櫃をになひ頬被りして通りける。國秩父の執權

本田の二郎きつと見て。ヤアこれなる下郎めは。かゝる晴いの庭なるに頬被は緩怠なり。色代せよと咎むれば彼の男小聲に。作法もしらぬ下々なれば御免と云ひてつゝと通るどこへ〳〵。扨々ぞんざい千萬なる奴めかな。頬被を取らずんば誰かある。それ打て叩けと下知すれば。中間ども承り一度にはらりと取りまはす。番匠の棟梁此の由を見るよりもいやこれ本田殿。彼奴は其の日雇ひの人足にて差別も知らぬ下郎なれば。さぞ推參も候べし。去りながらかゝる目出たき折なれば。たゞ何事も穏便に計らひ給へと申しけり。本田聞き入れず。いやさ彼めはもと人に似たる者の候といへば。扨珍しや本田殿。人が人に似たるとは事新しう候いかに下郎め。己れ大ぶんの錢を取り乍らかだをして働かず。横着ひろぐの忍にこそ人々にも怪まれ。祝儀に邪魔をなしけるよ。價を損にする迄ぞ罷れと叱りければ。地よき幸と景清は荷ひし櫃を下しおき。迷惑さうにもみ手をして フシ表にこそは出でらるゝ。地重忠幕の内より御覽じて。暫く〳〵。詞いかにかたゞ〳〵。平家の落人こゝかしこに忍びて君を狙ふと聞きけるが。只今の人足はまさしく悪七兵衛と見しは僻目か。彼餘すな言うても是は一大事の柱立の淨めの庭。穢らしてはいかがなり。前なる野邊に追出し討て棄てよと宣へば。地もとよりはやる關東武者我も〳〵と駈向ふ。景清是を見て。になひ棒に仕込みたる件の痣丸するりと拔いてさしかざし。大勢を弓手にうけ頭を叩いてから〳〵と笑ひ。これお侍。詞某は尾羽を枯せし鎌倉の浪人者にて候が。朝夕にせまりかゝる忙しき營みを仕る。さすが人目の恥かしく顔をかくして有りければ。なんぞや某を悪七兵衛とは眼がくらみてありけるか。但しは其の景清が恐ろしさに面影に立ちけるか。よし何にもせよ是程まで雜言せられ。堪忍罷りならず景清程こそあらずとも。地そつと手なみを見せんずと例の痣丸小脇に掻込み。多勢が中に割つて入り火水になれと三重〳〵切合ひける フシ時刻も移らぬ。地其の内に十四五人切り伏せ重忠に見參せんと。此處の詰彼處の隈に駈入り〳〵騒けども。大勢に隔てられ今ははや是迄なり。深入して雜兵どもに手負ふせられては景清が。末代の名折なりまたこそ時節あるべけれ。いでおつ拂うて落ち行かんと番匠箱を押開き。太鼓小鼓手斧鋸やり鉋。屈竟一の手裏劍とおつ取り〳〵打立つれば。さしもに勇む軍兵どもわつというてはさつと引く。なほも寄せ來るものどもを小屋の小柱ひんぬいて。八方撫究に 三重〳〵振廻れば フシ秋の嵐に散る紅葉むら〳〵ぱつとぞ逃げにける。チヽさもさうずさもあらん此の度は仕損ずとも。此の景清が一念の。劍は岩を徹さんものをと。跳りあがり飛びあがり齒がみをなして行く雲の。月の都に上りける。悪七兵衛が力業。早業輕業神通業たゞ飛ぶ鳥の

ごとくなりとて恐れぬ。ものこそなかりけれ。

第二

さるほ。どに。地誠や猛き武士も戀に寢るゝならひあり。薪を負へる山人も立寄る花の景清も常に清水寺の觀世音を信じ奉り。參詣の道すがら清水坂の片傍に。阿古屋といへる遊君にッシ假初臥のかり枕。地いつしか馴れて今ははや二人の若をぞまうけける。兄の彌石六歲弟彌若四歲にて。世におとなしくぞ見えにける。阿古屋はもとより遊女なれども。妹背の情細やかに世になき景清をいとほしみ。二人の子供を養育し兄には小弓小太刀を持たせ。父が家業をつがせんと。習はぬ女の身ながらも兵法の打太刀し。武道を教ゆる志たゞひ稀にぞ三人聞えける　フシかゝる所へ。地惡七兵衛景清は重忠を討損じ。やうノ〳〵として清水やッシ阿古屋が庵に着き給ふ。地女房子供を引連れこは珍しや何として。御上り候ぞ先づ此方へと請じける。詞景清申しけるは內々御身も知るごとく。我平家の御恩を報ぜんため鎌倉殿を狙へども。其のかひなくて一兩年は。尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ空しく月日を送りし所に。此の度畠山の重忠東大寺再興の奉行に上るをよき機と。先づ重忠を狙はんため我が身を卑しき下郎にしなし。すでに間近く付けよせしが運强き重忠にて。地我等が智略現れ本意なくも討損じ一向に重忠と差違へ死なんとは思ひしが。思へば御身がなつかしく。子供が顏をも見まほしく無念ながらも存へて扨只今の仕合せなり。詞誠に久しく逢ぬ間に子供もいたう成人し御身もずんと女房をしあけたり。地なんでも今宵はむつまじくと積るつもりさを語らんと。しとよとはば忍ゝ。詞榮え燿いしい斯く浪人の憂身といひ殊更敵を持つた身が。せめて一年に一度の便をもし給はず。ヲゝそれも理よ。地此の頃聞けば大宮司の娘小野の姫とやらんに深い事と承る。尤かな自らは子持蕉のうらぶれて。見るめにいやと思すれども子に絆されての御出か。恠氣するではなけれども浮世狂ひも年による。しやほんにをかしい迄ッシよい機嫌ちやのと有りければ。色詞景清打笑ひ是は迷惑。其の大宮司の娘小野の姫には しか〳〵物をもいはゞこそ。八幡々々さうした事で更になし。地そちならでは世の中にいとしい者が有るべきかと。なほももたゝる袖枕阿古屋も心打解けて思ふあまりの戀いさかひ犬が食ふとや是ならん。銚子盃携へて彌石に酌とらせ。三とせ積りし物語。語らひあかし給ひけるッシ契の程こそゆかしけれ。地景清宣ふやう我久しく尾州に蟄居して觀音參詣意れり。在京の間は一先づ日參の志あり。さり乍ら是より毎日往來せば人の咎めも如何なり。轟の御坊にて一七夜は通夜申す。地やがて歸り對面せんと編笠取つて打かづきおもてをさして出で給へば彌石門迄送り出でゝ。さらばさらばの

小手招きオクリしをらしへかりし生先なり。
地こゝに阿古屋が一腹の兄伊庭の十藏廣近は。北野詣をしたりしが。大息ついで吾が家にかへり。詞妹の阿古屋を傍に招き。是を見よ誠に果報は寢て待てとや。惡七兵衛景清を打づてなりとも搦めてなりとも參らせたる物ならば。勳功は望み次第との御制札を立てられたり。我等が榮華の瑞相此の時と覺えたり。兵衛はいづくに有りけるぞはやく六波羅へ訴へて。地一かど御恩にあづかんいかに〳〵と仰せける。阿古屋はしばし返事もせず。涙にくれてゐたりしが。なう兄上そもや御身は本氣にて宣ふか。詞たゞしは狂氣し給ふかや。地妾が夫にて候へば。御身の爲には妹婿此の子は甥にて候はずや。平家の御代にて候はば誰かあらう景清と。飛ぶ鳥迄も落し身が今この御代にて候へばこそ。數ならぬ我々を頼みて御入り候ものを。たとへば日本に唐土をそへて賜はるとてそもや訴人が成るべきか。飛ぶ鳥懐に入る時は狩人も助くるとよ。昨日迄も今朝迄も隔てぬ中をそもやそも。フシのかれう物かさりとては。人は一代名は末代。思ひわけても御覽ぜよと フシ泣いつ。くどいつ正めける。詞十藏から〳〵と打笑ひ。やれ名を惜みて得をとらぬは昔風の侍とて當世は流行らぬ古い事。其の上御邊が夫よ妻よなんどとて心中だてはしけれども。あの景清はな。大宮司が娘小野の姫に最愛し。御身が事は當座の花後悔するとも叶ふまじ。女さかしくて牛賣らぬとは御ぶんが事ぞ。諸事は兄に任せよと飛んで出づれば又引止め。地いや大宮司の娘は人のいひなし惡口ぞや。景清殿に限り左樣の事は候まじ。よし人はともかくも妾が二世の夫ぞかし。さ程に思ひすゑ給はば子供も妾も害して後心のまゝになし給へ。やあ生けらん内はかなはじとスエテ縋りついてぞ泣き給ふ。詞しかる所へ熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清樣の御旅宿所はこれにてや候やらんとやがて文箱を出しける。十藏出であひいかにも〳〵是は景清殿の旅宿にて候が。宿願あつて兵衛殿は清水參詣致され候。御文を預り置き歸られ次第見せ申さん。明日御出で候へと飛脚を返し。兄弟文を披いて見れば小野の姫の文にてあり。假初に御のぼりましまして否應の便もし給はぬは。かねゞ聞きし阿古屋といへる遊女に御親み候か。未來をかけし我が契いかゞ忘れ給ふかとこまゞとぞ書かれける。地阿古屋は讀みも果て給はずはつとせきたる氣色にて。うらめしや腹立ちや口惜しや妬ましや。戀に隔はなき物を遊女とは何事ぞ。子のある中こそ誠の妻よかくとは知らではかなくも。大切がりいとしがり心を盡せし口惜しさは人に恨はなきものを。男畜生いたづらものアゝうらめしや無念やと。文ずゝに引き裂きて スエテ出かこち恨みて泣き給ふ。フシことわり。とこ世そ。聞えれ。地十藏悅びそれ見たか。詞此景清の上は片時も早く訴人せん最早思ひ切つた

かといへば。オヽ何しに心の殘るべき。せめて訴人してなりとも此の恨を晴してたべ。詞けによき合點と立出づれば又暫くと引きとどめ。とはいひながら如何に恨があればとて。夫の訴人はなるまいか。地いや又思へば腹も立つ憎いは女めエエ是非もなやと。或は止め或は勸め スエテ身を悶えてぞ歎かるる。地十藏袂をふり切つてエ輪廻したる女かな。そこ退けと突きのけて。六波羅さして急ぎしは料簡もなき 三重〈しだいなり ツシ斯くとは知らで。地景清は清水寺に參籠し。地鹿の御坊に通夜申し。同宿達に雙六打たせ助言してこそゐられけれ。頃は卯月十四日夜半ばかりの照る月に。直甲五百餘騎江間の小四郎大將にて。訴人の十藏まつ先かけ。鹿の御坊二重三重に取りまはし。関の聲をぞつくりける。元來こらえぬ荒法師門外につつ立つて。そも此の寺は田村將軍此の方守護不人の靈地なるに。狼籍は何者ぞよ盗人なんどと覺えたり。あれ打ちとれ小僧どもと聲々に呼ばはれば。江間の小四郎駒かけよせ。さないはれそ法師たち御坊に科はなけれども。平家の落人惡七兵衛景清今宵こゝに籠りし由。伊庭の十藏訴人によつて義時討手に向うたり。異議に及ばば寺ともいはせじ沙門ともいはすまじ。片端切つて切りちらせといひも敢ぬに惡七兵衛。是に在りと切つて出る常陸の律師覺範此の由を見るよりも。慈悲第一の此の寺にて信心の行者を空しく討たせて。觀世音の誓願はいかならん。防げや〳〵法師ばら支へよや下僧ども。承り候と衣の袖を絞り上げ。地得物々々を提げて三十餘人の荒法師。五百餘騎につつ支へて命を惜まず 三重〈戰ひける ツシ五百餘騎が四方に分つて隙をあらせず防げども。景清飛鳥の術を得たれば左右なく討れんやうもなく雙方しろみて控へたり。景清椽端につつ立つて。今宵の訴人は妻の阿古屋同じく兄の十藏と覺えたり。おのれ數年の恩愛を振捨てて大慾にふける愚人ども。勿體なくも此の寺に血をあやす奇怪さよ。とても世になき某がおのれらが身のためならば何條命惜しからん。人多く討たせんより女房兄弟下合て搦め取れとぞわめきける。十藏が下人二三太といふくせもの分別もなく飛んでかゝる。景清莞爾と打笑ひ側にありける雙六盤。片手に取つて投げつくれば二三太が眞甲に。響き渡つてはつしとあたれば首は胴にぞにえこみける。ヲヽ重五ともせぬ丁稚めが手柄しさうに見えたれど。五四〈となりけるは誠に愚人夏の蟲と戲れて立つ所を。十藏續いて切つてかゝる景清薙刀押つ取りのべ。蟲同然のこつぱ武者婆婆の訴人は是迄ぞ。閻魔の廳にて訴人せよと受けつつ流しつつ切り結ぶ。江間の軍兵是を見て。訴人討たすな加はれとどつと連れておし隔つる。心得たりと景清は西門を小楯に取り。入りかへ〳〵大勢を左右にうけ。眉間眞甲鎧のはづれ嫌はずあまさず 三重〈打ちたつる ツシ

こは敵はじと。軍兵ども十藏を引つゝみ。六波羅さしてぞ引きにける。景清今は是迄と音羽の山の峰を越え。梢をふみ分け巖をおこし飛びこえ。はね越え飛越え紀那が間に飛ぶが如くにあづま路さして落行きしは。誠に稀代の武夫やと扨感ぜぬ。ものこそなかりけれ。

第三

かくて。其の後。惡七兵衛景清行方知れずなりたれば。最も天下の御大事と諸國の所緣を詮議ある。中にも熱田の大宮司は現在の舅とて。千葉の小太郎搦め取つて警護厳しく打ちつれさせ六波羅に引据ゆる。洞梶原源太大宮司に對面し。汝は當家の大敵平氏の落人景清を。婿にとるのみならず剩へ行方もなく落しける。罪科甚だ輕からず。いづかたへ落しけるぞ眞直に申せ。少しも陳ぜば拷問せんとはつたと怒つて申しける。大宮司聞給ひ。仰の如く景清とは緣を結び候へども。去年の春國許を立出で今に便も候はず。土も木も源氏一統の御代なるに。一旦陳じ申すとて隱しとがられ申すべきか。婿に取りしを曲事とて誅せられんは力なく候。行方に於ては存ぜぬと詞すゞしく申さるる。重忠仰せけるは尤々。たとへ行方を知つたればとて婿の訴人は致されまじ。たつては此方の不調法いかに梶原殿。かの景清は仁義第一の勇士なれば。所詮大宮司を牢舍させしと傳へ聞かば。剪の難を救はん爲。已れと名乘り出でん事は目前に見え候。此の儀はいかにと有りければ。諸おの〳〵評定尤と。六波羅の北の殿に新造に牢を建て。大宮司を押込めさせ厳しく番をぞ三重へ。せさせらる

小野姫道行

ハルフシ人につらくは。當らねど。何の報や袖の露。濕れも果てなで小野の姫いたはしや去年の春。夫は都へ去にしより。スエテ阿古屋の松の夕時雨。染めつけられて若紅葉。戀や散らんとあけくれに。フシオクリ人目。つゝみの。くひ〳〵とフシ案じ煩ふ。身の上に。父は都の六波羅へ。擒となりてフシあさましや。憂きめにあはせ給ふとの。その音信をきゝしより。本フシ思に思ひつみかさね。ハルフシせめては憂きに。かはらんと。乳母ばかりを力にてオクリ旅の。衣手涙つめたき紅に。フシ紅絹裏濡れて夕ぎれし。フシ空飛ぶ鳥の。歸るさに。物忘れせぬ故郷の。風もわが身にふきかへて今の門出を。フシをはりぞこの國の。名殘も。つゝましく。身の種蒔きし產の神。スエテ熱田の宮居伏拜み。父と夫とを安穩に惡魔はらへと取る弓の一乘名の舟に梶枕。スエテ敷寢の苫のあらむしろ。肌にあれてつらけれど。戀するあまが鷲蕉のフシよるの衾とみる。め刈る。かづく刈藻はなに〳〵ぞオクリ歌に。よまれしひじき藻や。搗布甘海苔春もまた。若布世出まじりの目刺はす。キンハーフシ鹽屋が軒に竹見えておさな鶯。フシ音をぞなく。花にまがひのさくら海苔天をひたせば。雲のりに

月を。包みて刈るとはすれど。手には取られぬ。桂男のア、いぶりさは。いつ青海苔も加太海苔と。身の相良布を莫告藻や。歌ギンあらめ。らしと荒布かる。二見の浦ははるゞ〳〵と。フシ松の緑立色の濱ノフシ蒓繪によくも。似たるよな。あとは白雲とゝは。尾張の大宮司が娘なるが。故もなきに父をとられ候ゆゑ。我命に代らんため。是迄參り候と言はせもはてす景季ヲ、皆迄もいふな。己れが親の大宮司に。景清が行方を云へといへども知らぬといふ。己れは夫婦の事なればよも知らぬ事はあるまじきすでに清水坂の阿古屋は子のある中さへ振捨てて一度注進申せしぞや。ありのまゝに白狀せよと小腕取つて怒りける。地なう恨めしや命を捨てて。是迄出る程の心にて假令行方を知つたればとて申さうか。此の上は水責火責にあふとても夫の行方は存ぜぬなり。只父上を助けてたべとスエテ聲も惜まず泣き給ふ。詞ヲ、いふ迄もない事さ。己れ落ちずばたゞ置くべきかと。地高手小手に縛りつけ。六條河原に引出し種々に拷問したりしはなう情なうこそ三重見えにけれ。

地梶原景子が奉行にて。方一町に垣をゆひ突棒刺股鐵の棒。兵具ひつしと並べしはさながら修羅の獄卒が。八逆五逆の罪人をフシ苛責にかくる如くなり。地いたはしや小野の姫あらき風にもあてぬ身を。裸體になして縄をかけ。十二子の梯子に。胴中を縛つけ哀れもしらぬ雜人ども。湯桶に水をつぎかけつぎかけ落ちよ〳〵と責めけるはたゞ瀧津瀬の如くにて フシ目もあてられぬ氣色なり。地むざんやな小野の姫息もはや絶え〴〵に。心も亂れ目くるめき既に最期と見えけれども。いや〳〵武士の妻となり心弱くてかなはじと。さあらぬ體にもてなしいかに方々。夫の景清つねに清水寺の觀世音を信仰し我にも信じ奉れと深く敎へ給ふゆゑ。今とても尊號を絶えず稱へ奉れば。此の水は觀音の甘露法雨と覺えたり。今この水にて死する命は惜しからじ。夫の行方

地扨父上のおはします牢屋は何處なるらんと。こゝかしこに佇み給へば折りもこそあれ梶原源太。町廻りして歸るさに此の體をきつと見て。詞彼奴が有樣たゞ者ならず何者ざふと咎めける。姫君聞召しさん候自ら

は知らぬぞや千日千夜も責め給へ。南無や大悲觀世音と苦しき體を押し隱し。潔くは宣へども。さすが強き拷問に聲も濁りて身も顫ひ。弱々となり給ふはスエテ扨も悲しき次第なり。詞此の分にては落つまじきぞやれ古木責にせよやとて。細首に繩を付け松の枝に打ちかけて。地ゑいや〳〵と引き上ぐる下せば少し息をつぎ。引き上ぐれば息たゆるフシあはれといふも餘りあり。地たとへいかなる鬼神も是れにては落つべしと。二三度四五度責めかければ今はかうよと見えけるが。詞又目をひらきなう梶原殿。此の木の上に吊上げられ世界を一目に見おろせども。夫の行方は見え申さず。方々も慰みに。ちつと上つて見給はぬかフシ是へ是へと有りければ。景時腹に据ゑかね。詞扨々しぶとき女かな。此の上は引きおろし火責にせよと。炭薪を積み重ね。團扇をもつて煽ぎ立て〳〵。天を翳めし黑煙焦熱地獄といつつべし。地すでに責めんとせし所に惡七兵衛景清いづくにてか聞きたりけん。諸見物の其の中を飛び越え跳ね越え垣の中に躍り入り。こりや景清ぞ見參とはつたとねめ廻はし。仁王立にぞ立つたりける姫君はつと肝潰れ。立寄らんとし給へば人々取つて引きすゑ。地すは景清を遁がすなと一度にはらりと取りまはす。景清けら〳〵と笑ひ。エヽ仰々し此の景清が隱れんと思はば。天にも昇り地をも潛らんずれども。妻や舅が憂目を見る悲しさに。身を捨てて出でたればもはや氣遣ふ事はなし。さあ寄つて繩をかけ六波羅へ連れて行け。妻や舅を助けよとフシ手向ひしてんず氣色なし。地姫君涙をながし口惜しの有樣や。自らや父上は生きてかひなき憂き身なるに。御身は存らへ本望遂げんとは思さず何とて是へは出で給ふ。あさましの御所存やとスエテ又さめ〴〵と泣き給ふ。景清も涙を抑へ賴もしの心底や。人は素性が恥かしし。子中をなせし阿古屋めは夫の訴人をしたりしに。御身は命に代らんとは賴もしや嬉しやな。さりながら父大宮司の御事心許なう覺ゆれば。御身は是よりとう〳〵かへり菩提を弔うてたび給へと。鬼をあざむく景清もスエテ不覺の涙を流しけるフシ理り。せめて哀れなり。地この事六波羅に聞えしかば。重忠大宮司を同道にて六條河原に馳せ來り。詞さても景清人の難儀を救ひ。我が身を名乘りて出らるゝ段近頃神妙尤もかうこそあるべけれ。此の上は小野の姫大宮司共に御赦免なさるゝ條。景清に繩をかけ急ぎ引立て申すべし。地長つて人々繩よ綱よとひしめけば景清悅び。それこそ望む所よと己れと千筋の繩をかゝり。先に進めば小野の姫なう自らも諸共と。駈出で取付き泣き給ふを大勢中を押隔て。あたりを拂つて引つ立て行く。景清の心底勇あり義あり誠あり。前代未聞の男なりとて皆武士の。手本と仰ぎける。

第四

かくてそのいち。はけにや猛將勇士も逃げ去きぬれば力なし。不便やな景清鎌倉よりの評定にて。六波羅の南表に始めて牢を建てさせらる。櫟白樫楠の木樽の木。長さ一丈にとらせ地へは七尺掘入れ上三尺の詰め牢にしこの木を以て蜘手格子に切組んで。一尺二寸の大釘の末をかへさず打ちたればフシ鋼をうゑたる如くなり。地七尺ゆたかの景清を二重に取つて押し入れ髪を七把に束ねて七方にこそ吊つたりけれ。足を牢より引き出し左手右手へ取りちがへ。山出し七十五人して曳いたる楠にて上げ絆をうたせ。しつ錠詰金。たゝ唐櫃千引の石材木を積み重ね。首には根掘りの大箇を三枚迄撞せたり。諸人に見せて恥かゝせよと。番も警護も付けされども又テなか〳〵五體働かず。されば文王は羑里に捕はれ。公冶長は刑戮にかゝれり。君がため名のため何ぞ曾て憂へんと。觀音經の讀誦の外。世言口を閉ぢたれば。聲聞耳に鎖せり。働く物は兩眼のみフシ見る目も悲しくあはれなり。地いたはしや小野の姫不思議の命助かり。牢屋近きに宿を取り。酒果物をとゝのへて。牢屋の格子に立寄りフシいたはり給ふぞ哀れなり。やう〳〵として景清心地よげに酒を飲み。詞今日は一しほ骨髓に徹つて候。誠に御身の志いつの世にかは忘るべき。地扨かりそめながら某は天下の朝敵さだめて最期も遠からじ。今景清が生きたる顏を形見にて。とう〳〵御身は尾張へ下り後世を弔うてたび給へ。これに付けても阿古屋めが心底の恨めしさよ。二人の子供も今は早殺してや捨てつらん。思へば〳〵景清が運のつきこそ口惜しけれと。フシ恨みかこちて泣き給ふ。地姫も涙をながし御仰はさる事なれども。とても自らは御最期の先途を見屆け。兎にも角にもなり參らせん。一日も一時も御命のあらん内は。往生の御營みを心にかけて何事も。定まる事と思召し人をな恨み給ひそよ。いつ迄も是にありたく候へども。人目しげう候へは明日又參り申さんと。泣く〳〵。歸り三重へ給ひけるフシ是は扨置き。地阿古屋の前彌石彌若もろ共に。山崎山の谷蔭に深く隱れておはせしが。地景清牢舍と聞くよりも我が身もあるにあらればこそ。六波羅に走り着き此の體を一目見て。なうあさましの御風情や。やれあれこそ父よわが夫と。牢の格子に縋りつきフシ泣くより外の事ぞなき。詞景清大の眼に角を立てやれ物知らずめ。人間らしく言葉をかくるも無益ながら。かほどの恩愛を振り捨て夫の訴人をしながら。何の生面下げて今此の所へ來りしぞ。地おのれ指一つかなひなば。掴みひしいで捨てん物をとスエテ齒がみを。してぞられける。地實に御恨は理りなれども。妾が事をも聞き給へ。兄にて候十藏訴人せんと申せしを。再三止めて候所に。大宮司の娘小野の姫とやらんより。親しき御文參りしゆゑ女心のあさましさ嫉妬の恨みに取りみだれあとさきの

踏へもなく。當座の腹立ッシやるかたなく。地ともかくもと申しつる後悔先に立たばこそ。さは去りながら嫉妬は殿御のいとしさゆゑ。女の習ひ誰が身の上にも候ぞや。申譯致す程皆言ひ落ちにて候へども。今迄の好みには道理一つを聞分けて。只何事も御免あり今生にて今一度。詞をかけてたび給はばそれを力に自害して。わが身の言譯立て申さんと ヌエテ 地にひれ伏してぞ泣き居たり。地むざんやな彌石父が姿をつくづく見て。詞なう父上程の剛のものがなぜやみ〳〵とは捕はれ給ふぞ。いで押し破つて助け奉らんと。地柱に手をかけゐるいや。ゐいやと押せども引けども。ゆるがばこそ ヲシ 不便なりける所存なり。地弟の彌若絆の足に抱き付き。詞痛いかや父上様。なういたむかと撫上げ。撫下げさすり上げ。兄弟わつと叫びければ思ひ切つたる景清も ヌエテ 不覺の涙せきあへず。地やゝあつて涙をおさへやれ子供よ。地父がかやうに成りたるはな。皆あの母めが悪心にて繩をも母が掛けさせ。牢にも母が入れけるぞ。地邪慳の女が胎内より出でたる者と思へば汝等迄が憎いぞゐ。父とも思ふな子とも思はじ。はやはやの鰐れと叱るにぞ。子供は母に縋り付きなう父をかへしや父上かへせと。ねだれ歎きし有様は ヲシ 目もあて。られぬ次第なり。地阿古屋は餘り堪へかねて。よし此の上は自らは兎も角も。可愛いやな兄弟に優しき詞を只一言。さりとてはかけてたべなう。子は可愛いふは思さぬかと ヌエテ 又せき上げてぞ歎かるる。詞景清重ねて。お事がやうなる悪人に返答もせじとは思へどもな。今の悔みをなど最前には思はざりしぞ。されば天竺に獅子といふ獸あり。身は畜生にてありながら。智慧人間に超えたれば。狩人にもとられず却つて人を取り食ふ。されども腹中に蟲蛭といへる蟲あつて。此の蟲毒を吐くゆゑに體を破つて自滅すなり。されば女の嫉妬の仇。人を恨むと思へども夫婦はおなじ體なれば。皆是わが身をせむる理。和御前がやうなる我慢愚痴の猿智慧を。獅子身中の蟲に譬へて佛も戒め給ふぞや。汝が心一つにて本望遂げずあまつさへ。恥辱の上の恥辱を取り。今言ひ譯して妻子が歎くを不便よとて。日本一の景清が再び心をかへすべきか。何程いうても汝が腹より出でたる子なれば景清が敵なり。妻とも子とも思はぬと思ひ切つてぞゐたりける。地扨は如何程に申しても御承引あるまじきか。ヲシ 詞くどいくどい。見苦しきに早々かへれ思ひ切つたぞ。地なう最早ながらへて何方へ歸らうぞ。やれ子供よ母が誤りたればこそかく詫言致せども。つれなき父御の詞を聞いたか。親や夫に敵と思はれお主等とても生きがひなし。此の上は父親もつたと思ふな母ばかりが子なるぞや。自らもながらへて非道の浮名ながさん事未來をかけて憐なや。いざもろ共に死出の山にて言譯せよ。詞いかに景清殿。妾が心底地是迄なり

と彌石を引寄せ守刀をずはと拔き。南無阿彌陀佛と刺し通せば。彌若おどろき聲を立て。いや〳〵我は母樣の子ではなし。父上助け給へやと。牢の格子へ顏を差入れ〳〵逃げ歩く。エヽ卑怯なりと引きよすればわつというて手を合せ。許してたべこらへてたべ。明日からはおとなしう月代も剃り申さん。灸をもすゑませう。扨も邪慳の母上樣や。助けてたべ父上樣とスエテいきをばかりに泣きわめく。地ヲヽ理よさりながら。殺す母は殺さいで助くる父御に殺さるゝぞ。あれ見よ兄もおとなしう死したれば。お事や母も死なでは父への言譯なし。いとしいものよう聞けと。すゝめ給へば聞入れてあそれならば死にませう。父上さらばといひ捨てて。兄が死骸によりかゝり打仰きし顏を見ていづくに刀を立つべきぞと。阿古屋は目もくれ手もなえて。フシまろび。伏して歎きしが。エヽ今はかなふまじ必ず前世の約束と思ひ母ばし怨むるな。追つ付け行くぞ南無阿彌陀と心元を刺し通し。さあ今はうらみを晴し給へ迎へ給へ御佛と。刀を咽に押し當て兄弟が死骸の上にかつぱと伏し。共に空しく成り給ふ。フシ扨も是非なき風情なり。景清は身を悶え泣けど叫べどかひぞなき。神や佛はなき世かの去りとては許してくれよ。やれ兄弟よ我が妻よと鬼をあざむく景清も。スエテ聲を上げてぞ泣きゐたり。フシ物の。哀れの限りなり。地かくとは知らで伊庭の十藏。梶原がとりなしにて。少々勳功にあづかり若黨小者あまた連れ。遊山より歸りしが此の體を見て肝を潰し。詞是は扨しなしたり〳〵。不便の事を見る物かなこれ侍ども。我が此の如く御恩賞を受け。榮耀榮華に榮ゆるもきやつ等を世にあらせんため。この頃方々尋ねしかども行方のなかりしが。扨は何者ぞ偏執を起し害せしか。但しは大宮司が計ひと覺えたり。よし何にもせよなほ景清に言ひぶんあり。先々死骸を取りおけと傍らに葬ぶらせ。牢屋に向つて立ちはだかり。是さ妹壻殿。いつかに怨あればとて。現在の妻子を目前に殺させ。腕かなはずばなどいきほねでも立てざるぞ。内々は某御邊が命を申しうけ。出家せさせんと思ひしが最早ほつてもならぬならぬ。侍畜生大だわけといかつはいて申しける。景清くつ〳〵とふき出しこりや狼狽者。あの者どもは己れが貪欲心を悲しみ。自害したるが知らざるか。それさへあるにうぬ奴が口から侍畜生とは誰が事ぞ。命を惜む程ならばかゝる大事をたくむべきか。まつた生きようと思ふ程ならばべろ〳〵柱の五十や百。此の景清が物の數と思はうか。心中に觀音經讀誦する嬉しさになぐさみ半分に牢舍して在るものを緩意過ぎたる蠻言つき。二言と吐かば摑みひしいで捨てんずとはつたと睨で申さるれば。十藏かんら〳〵と笑ひ。其の縛にあひながら某を摑まんとは。腕無しの振り嗤傍いたし事をかし。幸ひ此の頃痃癖

いたきに地ちつと摑んで貰ひたしと空嘯いてぞゐたりける。景清腹に据ゑかねいで物みせんと言ひもあへず。地南無千手千眼生々世々。一聞名號滅重罪大慈大悲觀音力と。金剛力を出しゑいやつと身震すれば。大釘大繩はら〳〵ずんと切れてのいた。貫木取つて押しゆがめ扉をかつぱと踏み倒し大手をひろげて跳り出で。八方に追廻すは荒れたる夜叉の三重へごとくなり。ッシ群りかゝる。若黨中間はら〳〵と蹴倒し。十藏をかい摑み取つて押伏せ。脊骨も折れよとどうどふまへ。詞何と景清を訴人して御褒美にあづかり榮華といふは此の事かと。二つ三つ踏み付くれば。なう悲しや。骨も碎けて息も絶え入り候。御慈悲に命を助け下されと聲を上げ歎きける。景清手を叩き打笑ひ。ヲ、其が褒美には廣い國を取らせんと。兩足取つて逆さまに引上げ。肩をふまへてゑいやつと裂きければ。胴中より眞二つにッシさつと裂けてぞのきにける。エ、心地よし氣味よしと弓手馬手へからりと捨て、地さあしすましたり此の上は關東へや落ち行かん。いや西國へや立ち退かんと。行きつ。戻りつ。戻りつ行きつ。一町ばかり走りしが。いや〳〵此の度落失せなば。又大宮司や小野の姫靈目を見んは必定と。思ひ定めて立歸りもとの牢屋に走り入り。内より貫木しとゝ締め。地千筋の繩を身に纏ひさめらぬ體にて普門品。讀誦の聲はおのづから。卽身菩薩の變化ならんと皆奇異の。思をなしにける。

第五

かくてそ。の後。地石大將頼朝公南都の大佛御再興まし〳〵。既に成就と訴ふれば。供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと。天が下の科人京鎌倉の牢を開き殘らず。ッシ御免なされける。地中にも惡七兵衛景清は大事の朝敵重罪なれば。助くるに所なく佐々木の四郎に仰せられ。終に首を刎ねられ今は四海太平なり。大佛供養御聽聞有るべしと諸國の大名御供にて。南都に御下向なされける。路次の行列三重へ花やかなりッシすでに我が君。小倉堤にさしかゝり給ふ時。詞畠山の重忠息をばかりに馳せ來り。御馬の前に跪づき。扨も惡七兵衛は御成敗のよし承り候へども。未だ恙く牢の内に罷在り候。一大事の囚人なれば早速首を刎ねられ。然るべく候はんと謹んで申し上ぐゝ。頼朝聞召し不思議の事を申すものかな。景清は佐々木の四郎に申し付け。一昨日の暮程に首を打たせ。則ち其の首頼朝が見參して獄門にかけさせしが。僻事なるかと仰せける。重忠重ねて其の段は存ぜず候へども。重忠は今朝景清が生顏を確に見て參り候と。いひもはてぬに佐々木の四郎つつと出で。いや是畠山殿。筋なき事な申されそ。其の景清は某仰を承り。高綱が手にかけ首を刎ね。我が君の實檢に供へ。三條河原に獄門にかけて候ものを。景清が二人あるべきか。近頃粗忽千萬と嘲笑つて申さるゝ。重忠聞き給

ひ尤々御分が手にもかけつらめ。又重忠も確かに見て候はいかに。高綱色を違へはて埒もない事。一度切つたる景清が獻へるべきやうもなし。それは定めて血迷うて何をがな見られつらん。但しは寝ほれて夢をばし見たまふか。いやさ御分がうろたへて。よしなき者を景清と思ひ切つだるか。夢を見たるか慌てたるか。地これ目を覺して思案せよと フシ氣色がはつて爭ひける。地頼朝だん〳〵聞召し。詞いかさま佐々木畠山粗忽ある人にてなし不思議千萬晴れやらずいで是より取つて返し。地頼朝直に見分くべしおの〳〵鎖れ〳〵と。御馬の鼻を立て直し都に歸らせ。三重〳〵給ひけるフシ去る程に三條の邸に景清の首を切りかけ。平家の一族謀反の棟梁。悪七兵衛景清と高札を添へられたり。頼朝立ちより御覽あり。高綱重忠を招き是見られよと仰せける。重忠なほ不審晴れず誠大名立ちかゝり。よく〳〵見れば今迄景清の首と見えけるが。忽ち光明赫奕として千手觀音の。御首と變じ給ひける フシ歴劫不思議ぞ有難き。地しかつし所へ清水寺の大衆達。我も〳〵と馳せ參じ。詞扨も一昨日の夜中より佛前の部おの〳〵明きて候ゆゑ。もし盗人のわざにやと御戸を開きて候へば。觀音の御首切れて失せさせ給ひ。切口より血流れて禮盤長床朱にそみ。勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候故。驚き入つて御注進申し上げ候と事の次第を申し上ぐれば。地君を始め奉り畠山も高綱も。供奉の上下おしなべてスエテあつと感ずるばかりなり。地君信心の感涙を流させ給ひ。誠や景清平來清水寺の觀世音を信じ奉り。十七の春より卅七の今日迄。毎日卅三卷の普門品讀誦懈怠なく修行せしと聞きけるが。疑ひもなく觀世音。兵衛が命に代らせ給ふ有難さよと。地御手を合させ給ひければ。僧俗男女下々迄皆々禮拜恭敬してナガシフシ涙を流さぬ者もなし。地重ねての御諚にはかくては如何勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し一萬座の護摩を焚かせ。御首をつぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面すべし。いざ頼朝も參詣せんと御身を淨め佛の御首を直垂の袖にうけ入れて。清水寺への御參詣例まれにぞ 三重〳〵聞えけれ フシ枯れたる木にも。地咲く花の。千手の誓ひて有難き。地かくて頼朝御法事も事終り。佛の御首をつぎ參らせオクリ宿坊に〳〵入らせ給ひける。地時に佐々木畠山景清夫婦を伴ひ御前に出でらるる。詞頼朝御覽じ珍らしや景清よ。我を平家の敵とて狙ひ討つべき志。神妙〳〵尤も武士の勢ひにさうも有るべけれ。然れば頼朝が爲には御邊又敵なれば。討つて捨つべき者なれども。汝が身には觀世音入り替りましますゆゑ。二たび誅せば觀音の御首を再び打つ道理。勿體なし勿體なし。もし又頼朝運盡きて御邊に討たるゝ物ならば觀世音の御手にかゝると思ふべし。地此の上は助け置き。日向の國宮崎の庄を宛て行ふと。御懇情の御詞に御判を添へ

て賜りける。景清涙を止めかね。詞誠に身に餘りたる御諚の段。生々世々に有難く魂に徹つて覺え候。地かく情ある我が君と知らで狙ひ申せし景清が。所存の程こそくやしけれと。御前をも打忘れフエテ聲を上げてぞ泣きゐたり。地さて御土器賜り。諸國の大名殘りなくオクリ皆々盃さし給ふ。地重忠仰せけるは斯るめでたき折といひ。かつうは我が君御慰めのため和殿八島にて功名の樣子語りて聞かせ給へ。內々君も御所望なりしぞひらに〳〵とありければ。頼朝公を始め參らせ。滿座の人々一同にフシはやとく〳〵と望まるる。地景清辭するに及ばねば袴の裾を高く取り。御前に色代しオクリすぎし昔を語りける。いで其の頃は壽永三年。詞三月下旬の事なりしに。平家は船源氏は陸。兩陣を海岸に分つて。互に勝負を決せんと欲す。能登守教經宣ふやう。去年播磨の室山備中の水島。鵜越にいたるまで。一度も味方の利なかつし事偏に義經が謀いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討たん事こそあらまほしけれと宣へば。畳清心に思ふやう。判官なればとて鬼神にてもあらばこそ。命をすてばやすかりなんと教經に最期の暇乞。陸に上れば源氏の兵餘すまじとぞかけむかふ。景清是を見て。物々しやと夕日影に打物ひらめかいて切つてかゝればこらへずして。双向たる兵はフシ四方へばつとぞ逃げにける。さもしや方々よ。さもしや方々よ源平互に見る目もはづかし。一人をとめん事は案のうち物小脇にかいこんで。なにがしは平家の侍。惡七兵衛景清よと名乘りかけ名乘りかけ手取にせんとて追うて行く。三保の谷が着たりける兜の鍬を取りはづし取りはづし。二三度逃げ延びたれども。思ふ敵なれば遁さじと飛びかゝり兜を押つ取り。ゑいやと引く程に。鍬は切れて此方にとまれば主はさきへ逃げのびぬ。地遙かに隔てて立ち歸り。さるにても汝恐ろしや。腕の強きといひければ。景清は三保の谷が。首の骨こそ強けれとフシ笑ひて左右へのきにける。地昔わすれぬ物語お耻かしう候と。語り給へば人々はフシ一度にどつとぞ感じける。地かくて我が君御座を立たせ給ひければ。大名小名續いて座をぞ立ち給ふ。詞景清君の御後姿をつく〳〵と見て。腰の刀をするりと拔き一文字に飛びかゝる。おの〳〵是はと氣色をかへ太刀の柄に手をかくれば。景清しさつて刀を捨て。地五體を擲ち涙を流し。ハツア南無三寶あさましや。何れも聞いて給はれ。かく有難き御恩賞を受けながら。凡夫心の悲しさは昔に返る恨の一念。御姿を見申せば。主君の敵なるものをと。當座の御恩は早や忘れ尾籠の振舞面目なや。眞平御免を蒙らん。誠に人の習ひにて心に任せぬ人心。今より後も我とわが身を諫むるとも。君を拜む度毎によも此の所存は止み申さず。却つて仇とやなり申さん。とかく此の兩眼のある故なれば今より君を見ぬやうにと。いひも

あへず差添ぬき兩の眼玉を抉り出し。御前にさし上げスエテかうべをうなたれゐたりけり。塩頼朝甚だ御感あり前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬ如く又頼朝が恩をも忘れず。末世に忠をつくすべき仁義の勇士武士の手本は景清と。數の御褒美淺からず螺倉さして入り給へば。なほ景清は觀音に。三萬三千三百卷の普門品を讀誦して。日向の國を本領し悅び〳〵退出す。なほ〳〵源氏の御繁昌。國靜謐の始なるはと皆。萬歲をぞ唱へける。

右此本者依爲懇望文句音節等
悉校合加祕蜜令開版者也

竹本筑後椽

大阪高麗橋壹丁目
山本九兵衛板
山本九右衛門板